

# 「ジブシー」の少女、アメリカ人になる：

『あしながおじさん』におけるアメリカの孤児と同化の（不）可能性

森 有 礼

孤児の少女ジュディ (Judy) ことジェルーシャ・アボット (Jerusha Abbott) のシンデレラ・ストーリーを描くジーン・ウェブスター (Jean Webster) の書簡体小説『あしながおじさん (Daddy-Long-Legs、以下 DLL)』(1912) は、米国 20 世紀少女小説の古典として知られている。ニューヨークに程近い孤児院で育ったジュディはその文筆の才を認められ、毎月手紙で生活の様子を報告するという条件で、裕福な匿名の評議員からの後見を得て女子大に入学する。「あしながおじさん」とは、彼女がこの後見人に付けた綽名である。女子大在学中にジュディは作家になるべく奮闘するが、卒業後は作家として独立するのではなく、この「小父様」と結ばれる。続編である『親愛なる敵様 (Dear Enemy、以下 DE)』(1915) では、ジュディは自分が育ったジョン・グリア孤児院の経営者の座に収まり、大学時代の友人サリー・マクブライド (Sallie McBride) をそこの新院長に就けて、孤児院の近代化に取り組む過程が綴られる。だがこうした孤児達の物語の背景には、新たな多民族社会に変容しつつあった当時の合衆国の人種及び民族的地勢図と、それらに対する社会的な強迫観念とが窺える。本論はウェブスターのこれら二作品のうち、特に『あしながおじさん』に焦点を当て、20 世紀初頭の合衆国における階級的及び民族的他者について考察する。

『あしながおじさん』は、ヒロインのジュディが後見人の「小父様」に宛てた手紙で構成される。大学生活の様子を綴るジュディの手紙からは彼女の豊かな想像力が窺えるが、その想像力は時として彼女の潜在的危険性をも明らかにするようである。ここではジュディが自分の出自についてロマンティックな夢想を展開する手紙を見てみよう。

小父様には、赤ん坊の頃に揺籃から盗み出された女の子はいらっしゃいませんでしたか。

多分私がお子さんです！ もしこれが小説の中のお話だったら、ここで大団円ですわね。

自分が何者か分からないなんて、本当にとっても奇妙な気がします — ちょっとわくわくしてロマンティックな感じです。沢山の可能性があるのですから。恐らく私はアメリカ人ではないのでしょうか。そう言う人が沢山いますから。私は古代ローマ人の直系の子孫かも知れませんが、ヴァイキングの娘かも知れません。或いはシベリアの監獄にいて然るべきロシア人虜囚の子供かも知れません。または

私はジブシーなのかも知れません — ひょっとしたら、きっとそうなのでしょう。私は流浪の気性に富んでいますから、尤も、今の所それを十分に発揮する機会に恵まれませんけど。……追伸。一つだけはっきりしていることがあります。私は中国人ではありません。(DLL 58-59)

自身をお伽話の取り換え子と看做すジュディの夢想は典型的なフロイト的ファミリー・ロマンスのそれであり、後見人の「小父様」に対する彼女の素朴な養子願望とも取れる。だが「アメリカ人ではない」ことを自認する孤児の娘が中・上流階級の人間の家族になることを夢想するのは民族的及び階級的越境を希求することでもある。物語の結末で、ジュディは実際に「あしながおじさん」こと上流階級の事業家でニューヨークの名家の出身であるジャーヴィス・ペンデルトン (Jervis Pendelton) と結ばれるが、社会的階層秩序の維持と言う観点からすれば、ジュディ自身も認めているように「祖先の素性の分からない人間」と上流階級の人間との婚姻は「相応しくない」(DLL 127)。事実ジュディ自身も、自分の血統が「悍ましい (dreadful)」(DLL 127) ののではないかという不安のため、一度はジャーヴィスからの求婚を拒絶しさえする。ジャーヴィスが実は彼女の後見人である「あしながおじさん」であり、それ故彼は彼女の過去の秘密を知っていたという奇跡によって彼女の不安は霧散するものの、ジュディの出自は、当時の合衆国においては必ずしも望ましいものとは看做されなかった。例えばサンダー・ギルマン (Sander L. Gilman) は階級間の流動性の含意について次のように述べている。

階級間の流動性はほぼ常に危険な「雑種化 ("hybridization")」、或いは 19 世紀中盤の合衆国の疑似科学用語を使うならば、「人種混淆 ("miscegenation")」と看做されていた。事実 19 世紀の小説においては、性的存在としての 他者 の魅力は、別の人種のもしくは階級的 他者 の存在によって強調されている。(197) ギルマンが指摘するのは、階級間の流動性は常に人種的越境と、それを動機付ける性的誘惑とを含意していると言うことである。論点先取を承知で言えば、裕福な上流階級の紳士を籠絡してその妻になる孤児ジュディは、ギルマンの言う人種的・階級的 他者 なのだ。

本論の目的は、端的に言えばジュディのこの階級的流動性と性的魅力の源について検証することである。その議論の糸口として、上の引用で彼女自身が夢想するように、何故ジュディがジブシーを自己の民族的アイデンティティの理想とするのか (そしてそれは何故「中国人 (a China-man)」ではないのか) ということを探ってゆく。具体的には、『親愛なる敵様』を傍証として『あしながおじさん』におけるヒロインの階級の上昇の意味について検証し、その階級的境界侵犯が同時に人種的・民族的越境をも暗示することを確認することで、合衆国民にとっての内なる外部である孤児の人種的・民族的他者表象について考察する。

まずヒロインであるジュディが階級の上昇を果たす様子を確認しよう。例えば越智博美は、『あしながおじさん』の物語が、身元不詳の少女が「どの階級の文化も共有しないアメリカの中の……孤児院と言う外国から中流層へ、中流アメリカ人のエトスを学習

してその階級に『同化』するという過程」(越智 423-24)を描いていると喝破する。ジュディにとっての女子大とは「淑女のための躰の仕上げをする学校 (a young ladies' finishing school)」(DLL 18)であり、そこでの教育を通じて彼女が果たす「進歩 (progress)」(DLL 10)とは、中流階級に相応しいマナー、健康な母体、そして中産階級の「女の子文化」(越智 422)を体得して、「中流アメリカン・ガールという『想像の共同体』に参画」(越智 423)することに他ならない(越智 414-23)。

ここで特筆すべきは、ジュディの読書、殊に児童文学への傾倒だ。他の同級生のような普通の家庭での生活を経験していないジュディにとって「大学生活で厄介なのは、習ったこともないことをあれこれと知っているのが当然と思われること」(DLL 16)である。「『若草物語』を読んで育っていない娘は学内で自分一人」だと気づいたジュディは、孤児院での「18年の空白」(DLL 24)を埋めるべく、毎晩「読んで、読んで、読みまくる」(DLL 24)。それは彼女が自身に課した「促成栽培の少女養成コース」(川端 184)であるが、こうした文学的素養は、彼女が中流階級の少女に「成りすます」ためには必要不可欠な要素である。

ところで、越智が先の引用でゆくりなくも孤児院を「外国」と呼び、そこに暮らす孤児を合衆国にとっての他者と見做している点は看過できない。それは一つにはジュディの「同化」が、ホミ・バーバ (Homi K. Bhabha) が呼ぶところの「植民地的擬態 (colonial mimicry)」、つまり「殆ど同じであるが完全にそうではない差異の主体が、矯正され、認識可能な 他者 を求める欲望」(86)であることを示唆している。「外国人」も同然のジュディは中産階級と言う 他者 の文化的規範を模倣し、それを「利用/占有 (appropriate)」(バーバ 86)することで社会的階梯を上昇してゆく。「家庭 (home)」に憧れながら「恐るべき孤児院にとり憑かれた子供時代 (that Dreadful Home looming over my childhood)」(DLL 19)を過ごした彼女にとって、「世の中で心安らかになる (feel at home in the world)」(DLL 51) 居場所を見出したことは幸いではある。だが彼女が抱く中産階級への同化の欲望はある意味極めて世俗的である。物語の冒頭で、ジュディは自分の帰るべき「家」についてこう夢想する。

想像の中で、ジェルーシャは次々と丘の中腹にある邸宅へ戻る車の後を追った。彼女は毛糸のコートと、羽根飾りの付いた天鵞絨の帽子を纏って、気のない素振りでも運転手に「家へ」と呟く自分を想像した。しかし家の玄関の敷居まで来ると、その空想は霞んでしまうのだった。

ジェルーシャには想像力があつた。……しかしいかに鋭い想像力でも、彼女をこの玄関の仲間では連れて行ってくれなかった。可哀そうに、幾ら熱心でも冒険心に満ちていても、小さなジェルーシャはこの17年一度も普通の家の中に入ったことがなかったのだ。(DLL 6)

ジュディの想像力が求める理想の「家庭」は富裕層のそれである。その意味では、「小父様」との婚約で終わる本作はジュディの願望充足の物語とも言えるが、しかし厳密に言えば、最後まで孤児という出自に悩まされ続けた彼女の内部には、バーバの言う「植

民地的擬態」に付き物の差異が維持され続けていることは付け加えておくべきだろう。

一方でジュディの「出身地」であるジョン・グリア孤児院の「外国性」は、彼女のみならず、合衆国における孤児の異邦人性を考察する際には見逃せない。例えばティモシー・ハクシ (Timothy A. Hacsí) による合衆国の孤児院と児童福祉の発達史研究は、世紀転換期の合衆国の孤児院に収容された孤児達の「大多数が白人で、合衆国生まれ」ではあったものの、「多くの子供達の少なくとも片方の親は移民であった」(121) こと、及び同時期の「有色人種」(これらには中国系や日系及びメキシコ系の非白人が、黒人と共に含まれる)の孤児達は、「彼等専用の施設」(122)に収容されていたことを明らかにしている。これは当時の孤児院が当時の合衆国の人種分離政策と人種的布置とを共に反映していると思われるが、実際にウェブスターの孤児院の描写はこうした事実にはほぼ忠実である。続編の『親愛なる敵様』においてジョン・グリア孤児院に暮らす孤児達は、「メイフラワー号の子孫」(DE 244)である「善良な普通のアメリカ人の祖先」を持つのではなく、「澄んだ茶色の眼をした多様な外国人 (a wide variety of foreigners with liquid brown eyes)」(DE 273)の、「口には出せないような遺伝素因」(DE 273)を持つ民族的他者である。その典型例が、喧嘩で殺された「イタリア人のオルガン弾き」(DE 244)の父と、「アルコール依存で死んだ」(DE 194)「アイルランド人の洗濯女」(DE 244)の母の間に生まれた「パンチ」と呼ばれる赤毛で茶色い瞳の少年である。彼はその「悪魔のような」(DE 195)振舞いで孤児院を混乱に陥れるが、彼の粗暴さは、彼が両親から受け継いだ所謂「民族的特性」に由来することが強く示唆されている。彼等の中には善良な家庭に養子に貰われて行く者もいるが、それは文字通り彼等がアメリカと言う国の養子になる/アメリカに適合すること(或いはその失敗)をも意味していることは留意しておくべきであろう。

孤児達の他者性は両親の民族性にのみ由来する訳ではない。当時の合衆国で隆盛を極めた優生学的見地からすれば、アメリカ人として不適切と看做される遺伝形質を持つ子供達もまた多くこの孤児院に収容されている。そして養子に出される子供達と対照的に、この種の子供達は不幸にも孤児のまま一生を過ごす/合衆国への適合に失敗することが暗示されているのだ。例えば鼠を虐待する残酷な気性の少年ジョン・コブデン (John Cobden) には「病的な遺伝形質」と「軽度の精神遅滞」(DE 292)が認められる。サリー院長の小間使いであるアイルランド系の少女サディ・ケイト (Sadie Kate) は、その奔放さ故に「小さな悪魔」(DE 220)と形容される。更に私生児の少女ロレッタ・ヒギンズ (Loretta Higgins) の来歴とその風貌は、彼女が病的な遺伝形質を持つ社会的不適合者であることを強く示唆している。

ロレッタは13歳です。ここに来てからの3年で、彼女は5回こうした感情激発を起こしました。……その両親の記録は簡素です。「母親はアルコール性痴呆症で死亡、於ブルーミングデイル収容所。父親は不明」……ロレッタの虚ろな目と大きな鼻、ぽっかり空いた口と顎のない顔、よれよれの髪の毛と突き出た耳を思い浮かべると、声も出せなくなります。こんな子供を愛する里親など世の中には

いないでしょう。(DE 220)

仮初にも愛らしいとは言えないロレッタの顔貌とその病的な行動は、彼女が、優生学者ヘンリー・ゴダード (Henry Goddard) がその著書『カリカク一族 (The Kallikak Family)』(1910) において定義する所謂「精神薄弱者 (the feeble-minded)」(199) — 遺伝的に精神及び知能の遅滞を持つ、合衆国の内なる他者 — であることを暗示する。

こうした文脈において外国人と精神薄弱者は共に国体を損なう他者として、殆ど常に人種的・民族的偏見の犠牲とされていた。同じく優生学者のチャールズ・ダヴァンポルト (Charles B. Davenport) は 1911 年の時点で、非アングロサクソン系の外国人移民によって合衆国民が「雑種化」されてゆく未来を次のように予見している。

近年の移民の状況調査を要約すると、この状況が自然に変わるか根本的に変更されない限り、合衆国の人々は、南欧系及び東欧系の血が大量に流入することによって、その肌は黒ずみ、体軀は小さく、気紛れになり、音楽や芸能に現を抜かす。また窃盗、誘拐、暴行、殺人、強姦及び性的不品行と言った犯罪傾向が、本来の英国系の移民が犯しがちな押し込み強盗、飲酒癖及び放浪の発生を上回るだろう。精神病院では外国生まれの患者が合衆国生まれの患者を相対的に上回っているのだから、人口における狂人の割合は急速に増加してゆくだろう。(18)

ダヴァンポルトは、外国からの移民という人種的・民族的他者が、合衆国に「犯罪と狂気の増加」という道徳的頹廃と精神的墮落を齎すことを懸念する。精神遅滞及び狂気と外国人とは、共にアングロサクソン・アメリカの国家身体を損なう元凶と考えられていたのだ。

繰り返せば、孤児とは優生学的にはアメリカ国内の外国人、わけてもその異常な遺伝形質によって国家を衰退させる可能性を秘めた他者である。中産階級の娘に成りすまずジュディもまた、文化的のみならず、民族的・人種的にもそうした「他者」であることは明白だ。前出の越智は、ジュディが結婚することになる「あしながおじさん」がジョン・スミスという仮名を用いていたことを指摘し、ジュディを神話的ヒロインであるポカホンタスに、彼女の夫となるジャーヴィスをアメリカ探検の英雄ジョン・スミスに准えて、『あしながおじさん』をアングロサクソン種の男性を救済する「民族再生のヒロイン」(428) の物語とする読みをも提示しているが (427-28)、ダヴァンポルトに従えば、ジュディの本質は寧ろ国家の雑種化を推進する危険な存在となる。先に挙げた、ジュディが自身の民族的アイデンティティの曖昧性に対して抱いた不安は、彼女の身体に刻印された、決して消すことのできない「(可能性としての) 非アメリカ性」という「異邦人性/異質さ (alienness)」、つまりバーバの言う植民地的擬態の永続的な痕跡である。

とは言え、『あしながおじさん』及び『親愛なる敵様』においてジュディの出自が明らかになることはなく、それ故冒頭の引用で見たように、彼女の「異邦人性」もまたその想像力の内部に留まっている。それでもなお前述の、自分はジプシーであるというジュディの認識は、合衆国の階級的及び民族的階層を揺るがす危険性を孕んでいる。しかし何故彼女は自身の民族的出自としてアメリカ人ではなく、ジプシーを希求するのか。

ここでジプシーことロマの歴史的現実に触れておくことは重要だろう。ロマは中世以降、永きに亘って激しい人種的・民族的差別を被ってきた。自身もロマの出自であるイギリス人言語学者イアン・ハンコック (Ian Hancock) は、西洋社会におけるロマ差別史研究の中で、ロマが本格的にアメリカに移住し始めた19世紀半ばの時点で、彼等が既に合衆国政府の人種差別的政策の対象となっていた事実を指摘している (105-14)。

19世紀末にかけての米国内の反ロマ政策は、恐らく奴隷制廃止に続く再建期の始まりに際して明らかになった人種差別の激化によって勢いづいた。ロマを「有色人種」、つまり目に見える少数民族と看做す言及が幾つか当時の文献に存在する。1866年にはアンドリュー・ジャクソン大統領が市民権法案に対して、「それが有色人種に有利に、白人種に不利に作用する」という懸念を表明した。何故ならその法案が「黒人とされる人種全体と共に、太平洋諸州の中国人や、税金を納めるインディアンや、ジプシーと呼ばれる人々を含む」からである (『有色人種のための法律』フィラデルフィア, 1866年2月)。<sup>1</sup>

ジュディの夢想とは裏腹に、「ジプシー」が実は米政府の移民政策の犠牲者であったことは言を俟たない。OEDですら、「ジプシー」を「暗い黄褐色」の肌と「黒い」髪をして、「籠編み、馬喰、占いその他を生業とし、その遊牧民的生活習慣のために常に疑いの目で見られてきた」(IV; 173)と差別的に定義し続けている程に、彼等に対する偏見は根深いと言える。

しかし文学 (或いはジュディの空想) に登場するジプシーは、彼等を取り巻く厳しい現実から乖離したよりロマンティックなイメージで捉えられているようだ。同じくウェブスターの『公正なパティ (Just Patty)』(1911) という小説の、「ジプシーの小道 ("The Gypsy Trail")」という章から例を引いてみよう。主人公のパティ (Patty Wyatt) と友人のコニー (Conny Wilder) の二人の少女は、高校の仮装祝祭日の余興のためにジプシーに扮装する。

二人はジプシーになった——喜歌劇のジプシーではなく、汚く、襷褌を纏ってつぎの当たった服を来た、本物のジプシーに (祝祭日前の一週間というもの、彼女達は毎日この衣装で部屋の埃を払っていたのだった)。パティは一方に茶色の、もう一方に黒い、目立つ穴が脛の部分に開いた靴下を履いた。コニーの靴の一方からは爪先が突き出しており、もう一方の靴底ははがれかけてパタパタしていた。二人の髪には櫛を入れた様子もなく、顔には汚れの筋が入っていた。彼女達こそ、正に本物だった。<sup>2</sup>

粗末で不潔な衣装を身に纏い、「珈琲」で「茶色く」顔と手を染めた彼女達は、タンバリンを手に通りで物乞いのダンスを踊るが、その様子は親しい友人にすら間違われる程に真に迫っている。だがこの迫真性故に、彼女達は常に「本物のジプシー」のパロディにしかなり得ない。彼女達は不仲になった担任の先生とその恋人とを、易占の真似事をして和解させるが、直後にその正体は見抜かれる。かくしてこの娘達は、ジプシーという偽のアイデンティティが他人の恋愛成就のための小道具に過ぎないことを明らかにす

る。彼女達は、ジプシーの通俗的イメージはともかく、その歴史的現実を模倣することはできないのだ。

事によると、ウェブスターはこうした「ジプシーに扮する者」のインスピレーションを、ジュディの愛読書であるブロンテ (Charlotte Brontë) の『ジェイン・エア (Jane Eyre、以下 JE)』(1847) に得ているのかも知れない。住み込みの家庭教師をして暮らす孤児ジェイン (Jane Eyre) の雇い主であるロチェスター (Edward Rochester) が、ジプシーの老婆に身をまかして彼女の恋心を探ろうとする場面 (JE 167-72) でも、目的を達したロチェスターは変装を解き、パティとコニーがしたのと同様にその正体を明らかにするのだが、これらのエピソードは共に文学に登場するジプシーがあくまで外見上の存在に過ぎず、その実態が巧妙にテキストから排除されていることを示唆する。事実ロチェスター家の富裕な滞在客達は、この場面の直前に「ジプシーのキャンプを見物するためにヘイ広場を訪れる」(JE 163) 計画について相談していた。ジプシーに変装したロチェスターが、彼等の眼をまんまと欺いて易占の真似事をやってのけられたのは、ジプシーに対する滞在客達の皮相的な好奇心と、何よりジプシーの実態に対する根本的な無知に付け込んだからではなかったか。

勿論、こうしたジプシーに対するこうした無知と差別的好奇心は看過されてはならない。ジプシーが手軽な美学的装置として文学作品の中でどのように濫用されるに到ったかについて、例えば富山太佳夫は次のように指摘する。「激しい人種偏見の対象となり、泥棒とか悪党とみなされた彼ら [ジプシー] はキャラヴァンでの生活を余儀なくされたが、まさしくそのことによって、村の人々には格好の観察の対象になるのである。それは好奇心と畏れをかきたてる対象であった」(102)。こうして「ピクチャレスク」(103)の美学の中に取り込まれる文学的ジプシーは、現実のジプシーが置かれた苦境から乖離した美学的点景に還元されて回収されてしまうこととなる。またハンコックは、ジプシーの真実がこうして常に既に不可視化されてきたことを問題視している。

ジプシーでない者達による、ジプシーに関する伝統的な虚構のイメージが余りに人心に浸透したために、真のジプシーの姿は顧みられることがなかった。

都会人からすれば、「真の」ジプシー——つまりロマンティックな神話に沿ったジプシー——は田舎の存在である。田舎の人間に言わせれば、「真の」ジプシーは最早存在しない。彼等は消えた民族文化の一部である。……個人は神話化されて支配層の文化から排除され、自然の一部とされている。(シブリー、1981 : 18)<sup>3</sup> (120)

ハンコックが批判するように、パティが扮し、ジュディが憧れる「本物の」ジプシーとは、正にそれ自体が「失われた者への憧憬」というロマンティック・イデオロギーの具現化に他ならない(ジュディ自身の「ロマンティック」な空想を思い起こしてみよう)。少なくとも文学テキストにおいて、それは決して実在することのない、仮象の存在に他ならない。ジュディが夢想する自己像としてのジプシーも、畢竟こうした文学的虚像に過ぎない。自身を「流浪の気性に富む」と認ずる彼女は、確かに孤児と言う立場故に合

衆国に暮らす「外国人」であると感じ続けていたかも知れない。だがそれは合衆国の全き他者として迫害され、定住権すら認められなかったために放浪の生活を続けざるを得なかったジブシーの実情 (Hancock 105-14) とは決定的に異なる。事実、彼女の「放浪」とは、孤児院を出て女子大に生活の拠点を置き、休暇を家庭的な友人宅や自然の豊かな田舎の農場、或いはニューヨークの煌びやかな都会の喧騒の中で過ごす程度の社会経験に過ぎないのだから。

だがこうした「文学的ジブシー」というアイデンティティの空虚さこそ、ジュディをしてその階級の上昇を達成せしめる重要な要素だったとも言えよう。ハンコックは西洋文化においてジブシーの女性が永らく「性的な誘惑者 (sexual temptresses)」(125) と看做されてきたことも指摘しているが、事実ジュディの「小父様」に対する対応は殆ど性的な誘惑行為と言っても差し支えないだろう。冒頭で挙げた「養子願望」も然り乍ら、彼女が綴る手紙は自身の女性としての魅力を繰り返し訴えかける。例えば21歳になったある日、彼女は「小父様」に向けて、己の美貌について若い女性らしい虚栄心溢れる告白をする。

小父様は、最近私が気づいた秘密について知りたくはありませんか。そして、私のことを自惚れ屋だとお考えにならないと約束して下さいますか。そうならば、お聞きください。

私は美しいのです。

本当にそうですよ。自分の部屋に三面鏡があるのにそれに気づかなかったとしたら、私は何てお馬鹿さんなのでしょう。 (DLL 95)

この手紙の直後、彼女はクリスマスの贈り物として「私をご存じでしたら、私のことを好きになってくださいますか」(DLL 96) と記して自分の写真を「小父様」宛の手紙に同封している。しかも小聡明くも、「本当の私は、それよりももっと美しいんですよ」(DLL 55) と付け加えることを忘れない。ジュディのこうした一連の働きかけは、「小父様」に対する、無意識かも知れないが十分に性的な誘惑として見るに十分であろう。しかもジュディにとって都合の良いことに、「ジブシー」というアイデンティティは(丁度パティがそうしていたように)、その想像力によって手軽に着脱可能なオプションである。誘惑者として恋人の関心を惹き、相手を自らの虜にした暁には、その虚構のアイデンティティを脱ぎ捨てることによって、ジュディは階級的にも民族的にも一見安全な「普通の女の子 (a Plain Girl)」(DLL 93) としてジャーヴィスとの婚姻に臨むことが許される。その意味でもやはり、文学的ジブシーとはジュディにとって自在に自身と「白人の少女」との間の階級的/人種の越境を可能ならしめる「小道具」であるのだ。だが逆説的にもそれこそが、人種的にも民族的にも「危険な」少女がアメリカと言う国家に同化するために必要とされた真のアイデンティティではなかったか。換言すれば、ジュディの「ジブシー」と「アメリカ人」の双方に対する植民地的擬態の欲望、即ち、自身が前者であることを夢想しつつ、しかしその不可能性を知りつつもひたすら後者に同化しようと努める、その彼女の欲望と同一化の対象との差異そのもの、即ち実際には決し

て存在しえない「他者」から「アメリカ人」への（そして同時にその逆方向への）変態の衝動こそが、彼女のアイデンティティの核を構成しているのだ。

尤も『あしながおじさん』の物語が大団円を迎えた後には、ジュディの「流浪の精神」なる潜在的他者性は、恰も最初から存在しなかったがごとく忘れ去られてしまう。続編の『親愛なる敵様』において、かつて「文学的ジプシー」を夢見ていた少女は、最早シンデレラではなく、上流階級の事業家の妻であるジャーヴィス・ベンデルトン夫人として、夫と共にジャマイカでの新事業に乗り出すが、そうした植民地主義の実践者こそが、ジュディの夢のグロテスクな現実であることは言を俟たない。それこそ衣装のように民族的及び人種的アイデンティティを取り換えながら社会的階梯を昇り詰めてゆくジュディの姿は、中世以来欧州の奴隷民の身分に永らく留め置かれ、近代以降も社会の最下層を放浪し続けて苦難の生活を送ってきたロマの実態とは似ても似つかない。だが正にこれこそが文学的想像力が描き出す、20世紀初頭の合衆国におけるジプシー差別の一つの典型例なのだ。

最後に急いで付け加えておけば、冒頭の引用の最後に追伸として、ジュディが自分は中国人ではあり得ないとユーモラスに、しかしわざわざ付け加えているのには一定の理由が想像できる。無論彼女の外見が東洋系らしくないということもあろうが、前述のハクシの調査が明らかにしたような、「人種別孤児院」の存在がその背景にあったことも推測される。白人、及び白人由来の移民の子供達だけが収容されているジョン・グリア孤児院には、勿論中国系の孤児が紛れ込むようなことは起こり難そうである。

だがより明白な理由は、中国人移民の人種的他者性に対する合衆国の認識であろう。ロバート・リー (Robert G. Lee) は、19世紀中盤以降、「 minstrel・ショーでの人種的他者としての中国人移民の表象は、克服できない文化的差異の比喩であった。……中国人は不必要な文化的余剰 [具体的にはピジン英語、ネズミ等の不潔な小動物を食物とすると噂されること、そして辮髪] を持つと看做された。この文化的余剰が、中国人を退化させ文化的衰退に導いた。この余剰と衰退は、当然ながら病気や伝染病や汚染などの含意を持っていた」(35-36) と指摘し、それ故「有色人種はその人種の劣等性故に白人と平等とは認められず、同化は不可能である」(47) と看做される結果となったことを確認し、これが所謂19世紀の黄禍論の根拠となっていたことを論証する。同じ人種的他者とは言え、白人の支配文化の中に絵画的点景として存在を許された「文学的ジプシー」とは異なり、徹底して異質な存在としてそこから退けられてきたという経緯が、中国系移民にはあった。それは彼等がアメリカへの同化を期待されず、また彼等自身の希望にも拘らず遂に認められもしなかったことの証左である。仮象のアイデンティティを手掛かりとしてアメリカ社会に同化し、最後には夫と共に植民地開発事業にすら乗り出すジュディにとって、中国系移民というアイデンティティは決して容認できないものだったに違いない。

かくして『あしながおじさん』は、ジュディの文学的想像力を糸口として、当時の合衆国における二つの人種差別を浮き彫りにする。共に白人文化によってステレオタイプ

的に表象されたジプシーと中国人とは、言わばコインの両面となって、アメリカ人となることを希求する孤児にとっていずれが望ましく、いずれが相応しくないアイデンティティであるかを仄めかす。だが繰り返せば、「孤児」が求める民族的・人種的アイデンティティとは、いずれにせよ彼等と、その同一化の対象たる「アメリカ人」との差異を抹消する訳ではない。それは「アメリカ人になることを希求する」者達の孕む危険な人種的・民族的差異を、常に合衆国の国家身体に接ぎ木し、且つ隠蔽し続けるために用いられる、自家撞着的なペールに過ぎないのだ。

本論文の元になった研究は、科学研究費基盤C（課題番号23520338）によって援助を受けたものであることを付記する。

#### 註

- 1 ハンコックのこの部分の引用原文は、原著である1987年の図書には含まれていない。本稿では、下記引用文献のインターネットサイトに掲示されている当該部分を参照の上、ここに引用した。
- 2 『公正なパティ』のテキストについては、下記引用文献のインターネットサイトのものを参照した。
- 3 ここでのハンコックよりの引用文のうち、ハンコック自身が引用している図書の出典は以下の通りである。  
David Sibley, *Outsiders in Urban Societies*. Oxford: Basil Blackwell, 1981.  
但し、本論ではこの原著の原文を確認していない。

#### 引用文献

- Bhaba, Homi K. *The Location of Culture*. London: Routledge, 1994.
- Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. 1847. Norton Critical ed. Ser. 3rd ed. New York: Norton, 2001.
- Davenport, Charles Benedict. "Migrations and Their Eugenic Significance." *Hereditary in Relation to Eugenics*. New York: Holt, 1911, 204-224. Rpt. in Mazumdar vol. 3 3-23.
- Gilman, Sander L. *Difference and Pathology: Stereotypes of Sexuality, Race and Madness*. Ithaca: Cornell UP, 1985.
- Goddard, Henry Herbert. *The Kallikak Family: A Study of the Heredity of Feeble-Mindedness*. Classics in Psychology Ser. New York: Arno Press, 1973.
- Hancock, Ian. *The Pariah Syndrome: An Account of Gypsy Slavery and Persecution*. Michigan: Ann Arbor, 1987.
- . *The Pariah Syndrome: An Account of Gypsy Slavery and Persecution*. *Reo Cities*. 1999-2000.  
<<http://www.reocities.com/patrin/pariah-contents.htm>> Jan. 6. 2013.
- Hacsi, Timothy A. *Second Home: Orphan Asylums and Poor Families in America*. Cambridge: Harvard UP, 1997.
- 川端有子. 『少女小説から世界が見える』東京：河出書房，2006.
- Lee, Roberet G. *Oriental: Asian Americans in Popular Culture*. Philadelphia: Temple UP, 1999.

越智博美. 「ジュディの進歩 — 『足長おじさん』再読 —」 『一橋論叢』 117 (1997) : 18-36.

富山太佳夫. 「明るい農村」 『ダーウィンの世紀末』 東京：青土社, 1995. 93-103.

Webster, Jean. *Daddy-Long-Legs and Dear Enemy*. 1912, 1915. London: Penguin, 2004.

---. *Just Patty*. 1911. Project Gutenberg. <<http://www.gutenberg.org/ebooks/21048>> 22. Jan. 2013.